

194

こんにちは。塾長の大井です。

いよいよ5期生たちの御三家や第1志望入試もあと10日に迫ってきました。

きっと誰にでも物を超えたものがあると思います。

いつまでも捨てられないノート、誰かにもらった贈り物、濃密だった年月の足跡。

私にとっては、子どもたちに贈る合格メダルがそれにあたります。

片面にはTOPのロゴを、そしてもう片面には私と田宮から、共に過ごした日々を振り返りありったけの想いを込めて、子どもたちの力になるようにメッセージを記したメダルです。

そして例年、冬講中(入試が始まる直前の年内最終授業)に、それを1人ずつ読み上げて首にかけます。

子どもたちは特別な面持ちでそれを受け取ります。

後ろでもうすぐ小6になる5年生たちが見守る中で。

12月29日、年内最終授業を迎えた5期生たちにも、例年のようにメ

ダル授与式を行うはずでした。

ただ、彼らの冬期講習中の答えは、お世辞にも仕上がっているとは言えないものでした。

取れるはずの問題を取りこぼし、あるはずの意図が欠けていました。できるはずの課題もいつも何かやり残しがありました。

もちろん、技術はまだまだ伸びていきます。冬期講習中でも、1月の併願受験中も、得点力は伸び続けます。いや、本番になってどんどん答案が締まってくるのは、過去の合格者たちにも皆共通のものでした。

しかし、5期生の不足は技術よりもっと根深いものでした。

それは一言で言うなら、「覚悟」としか形容できないものです。

誰もがその学校に入りたいと願っている、誰もが何年もそこに準備を重ねて来る。

その中で学校に伝わるのは、きれいな言葉でも、熱いスピーチでもありません。

ただ、1枚の答案で語るしかないのです。

高校野球の選手が1球に、情熱の全てを懸けるように。

オリンピック選手が、数分や数秒に4年間を、いや人生の全てを込める

ように。

たかが勉強じゃないか、たかが入学試験じゃないか。

そういう人もいます。

誤解を恐れずに言うなら、私もそう思います。

たかが中学受験、失敗してもいくらでもやり直すことはできます。入試はあくまで手段に過ぎません。

でも、選んだものにどう臨むかは、この上なく重要なことです。子どもたちが人生の中で、おそらく初めて切実に挑んだものです。

一生懸命注いだ。この上なく愛した。

それはどうあっても答案に映るのです。

「会を延期しようか。」

前日に田宮がそう言いました。

それは例年にないことでした。式は必ず 12 月 29 日に執り行って来ました。

それでもその時私が感じたのは、驚きではなく、その日にメダルを書かなくて済む、安堵感にも似た想いでした。

(次回につづく)

2019年1月21日

大井雄之